

酔っ払って大目玉

高木兼寛はときどき料亭で宴会を開いて医学校教員の親睦をはかった。明治41年ころの親睦会には、医化学講師の須藤憲三も出席していた。須藤は後に金沢医科大学（現金沢大学医学部）の学長になる人物であるが、酒は一滴も飲めなかった。兼寛は一人ずつ杯をやり取りしながら全員を一巡するのが習わしであった（彼は酒豪であった。そして太った腹が量につかえるといってつねに正座していた）。ちょうど須藤のところに来たとき、須藤が杯にまったく手をつけず始めから食事をしていることに気がついた。「まあ、須藤君、一つ」「私は酒は…」「ま、少しはいいだろう」「いや、私は酒は嫌いで」のやり取りののち、兼寛は冗談めかして「君、酒が飲めんようじゃ偉くはなれんぞ、須藤君」と言った。ところが虫の居所がよほど悪かったとみえて、須藤はゆっくり威儀を正して「私は酒は飲めませんが、偉くはなれます。酒と偉くなることは何の関係もありません」と言ったのである。これにはさすがの兼寛も一本とられた感じであった。たしかに豪快に酒を飲んだところで、それで偉くなれる保証は何もないからである。

そういえば兼寛には、若いころ、人には言えない酒のうえでの失敗がずいぶんあった。この時もそのことを思い出した。もともと兼寛が育った薩摩藩には、豪傑を好む気風があり、酒の席でも豪快な飲みっぷりが称賛された。しかしそれが豪快であるのか、粗暴にすぎないのか、区別は難しかった。兼寛にも豪傑の風があった。

明治5年から、兼寛（22歳）は上京して海軍病院に出仕していた（鹿兒島の英医・ウイリスのすすめもあって英国留学の機会を探るためであった）。海軍病院での師匠は典型的な英国紳士、Dr. アンダーソンで

あった。アンダーソンは、兼寛の明晰な頭脳に感心すると同時に、また裏表のない男らしい性格を好んだ。ただ彼には、兼寛の薩摩隼人的な粗暴さが気にならないではなかった。

兼寛はある夜、親友の実吉安純（後の慈恵医学専門校校長）と一緒に芝の鳥鍋で大いに飲み、酒のいきおいでそのまま Dr. アンダーソンの宅を訪ねた。アンダーソンはしぶしぶ家にあげ、とりあえずウイスキーをご馳走した。ところが兼寛はいきなりそのウイスキービンを手にとって、大言壮語しつつ、鯨飲（がぶ飲み）し続けたのであった。大醜態であった。

記憶がはっきりしないまま、翌朝、お詫びのためアンダーソン宅を訪ねたところ、アンダーソンは色をなして怒鳴りつけた。「君が昨夜やったことは断じて教養のある紳士のやる行為ではない。西欧の紳士は礼節を尊ぶことを本領としている。あのような行為は、英国では馬丁走卒でさえ断じてしないことだ。今後、君がもし酒気を帯びてわが家をたずねたら、一步も入れないから、そのつもりでおれ！」。

兼寛は一言もなく、その場に土下座し、ただ非礼を詫びるばかりであった。彼は、今後は絶対に大酒を飲まず、絶対に粗暴な振る舞いをしないことを堅くかたく誓った。そして西欧の紳士のごとく礼節を尊ぶことを終生の主義としたのであった。

アンダーソンもさすがに寛容な英国紳士であった。兼寛のこの態度のなかに、田舎育ちの少年のような純朴さをみとめ、彼を許した。そしてその後は、兼寛を自分の母校であるセント・トーマス病院医学校に留学させるべく鋭意努力した。

昔から慈恵医学校の教育方針の一つに「医師たる前に紳士たれ」というのがあったが、その源流の一滴は、この兼寛の失態にあったのではないかと思われる。